長崎県芦辺町文化財調査報告書　第４集

鬼の窟古墳

—環境整備事業報告書—

1990

長崎県芦辺町教育委員会

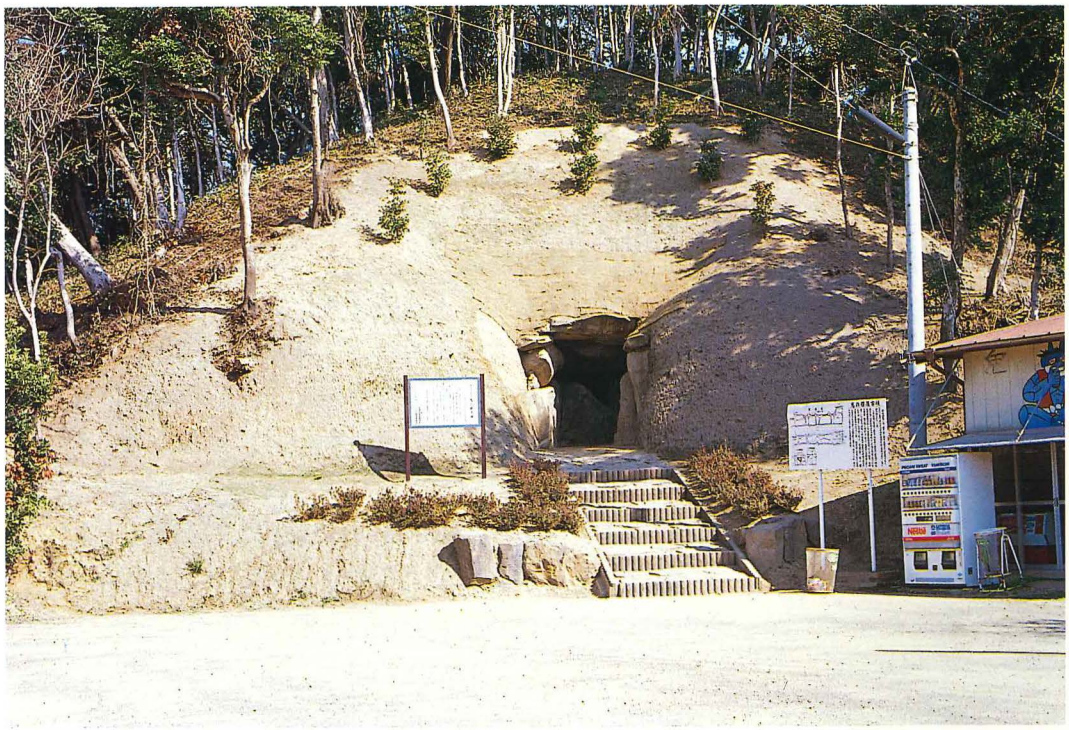
長崎県芦辺町文化財調査報告書　第4集

鬼の窟古墳

—環境整備事業報告書—

1990

長崎県芦辺町教育委員会



序

壱岐全島には，256基の古墳があり，その内72基が芦辺町にあり島民は鬼の窟として親しんでいる。特徴としては横穴式石室古墳が多く，特に島の中心となる本町国分付近は古墳が集中している。

この鬼の窟古墳は，壱岐名勝図誌にも笹窟（矢櫃鬼屋）として古くから知られ古墳の周囲，石室，高さ等も明記してあって江戸時代にも全国から見学者が多く訪れていたようである。昭和36年11月24日，長崎県史跡文化財として指定を受け，その後石室の実測を行い実測図を作成し広く一般に公開をしたが，長年の風雨と車の振動等により羨道の天井石に亀裂が生じ危険となったので昭和47年，鉄柱により補強工事を実施した。昭和62年８月，台風12号により倒木の影響で石室の前面左右が崩壊したため，土嚢により補修をしていたが完全ではないため，また鉄柱の腐食もあり平成元年度県の補助を受け環境整備工事を施行した。工事に先立，墳丘の正確な実測図もなく範囲が不明であったので県文化課の全面的な協力により範囲確認調査及び羨道部の発掘調査を実施した。その結果南北45メートル，東西45メートル，高さ13メートルをはかる九州でも最大級の円墳であることが判明した。また時代を知る上で貴重な土器も出土した。

古墳の環境整備の内容は天井石を接着し，羨道左右の崩壊防止用擁壁により墳丘を整形し復元した。また石室内が見学できるように照明施設をつけ，説明板も古くなっていたのでダイヤプレートに取り替えた。

今回の環境整備並びに発掘調査に当たっては所有者の横山幸代様をはじめ県文化課，壱岐支庁の御協力をいただいたことに対し厚くお礼を申し述べます。

平成２年３月31日

芦辺町教育長　野　元　茂　生

例　　言

1．本書は，長崎県壱岐郡芦辺町国分本村触に所在する鬼の窟古墳の天井石修復に伴う環境整備調査の結果報告書である。

2．事業主体は芦辺町教育委員会，調査担当は長崎県教育委員会が行った。

3．調査期間は，平成元年10月11～26日（16日間）まで実施した。

4．本事業関係者は次の通りである。

芦辺町教育委員会	野元茂生	教育長
	長嶋邦昭	教育次長
〃　産業振興課	大谷義春	事務吏員
長崎県教育庁文化課	高野晋司	主任文化財保護主事
	才津雅男	主　　事
	伴耕一朗	文化財調査員

調査ならび整備にあたっては，福岡大学人文学部教授・小田富士雄氏，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室長・沢田正昭氏，長崎大学土木工学科教授・伊勢田哲也氏の指導・助言を得た。

5．本書は分担執筆した。
Ⅰ・Ⅳを伴が，Ⅱ・Ⅲを高野が執筆した。

6．本書の編集は高野・伴による。

本 文 目 次

I　遺跡の立地と環境……1

II　整備に至る経過……5

III　整備の目的と方法……7

IV　調　　査……11

1．墳　丘……11
2．主体部……16
3．遺　物……19
4．まとめ……23

挿 図 目 次

Fig. 1　鬼の窟古墳位置図（1/4,000,000）……1
Fig. 2　周辺の古墳(1/25,000)……3
Fig. 3　幕末頃の鬼の窟……5
Fig. 4　修復・整備の方法……8
Fig. 5　壱岐(1/100,000)……10
Fig. 6　遺跡周辺地形図（1/2,000）……12
Fig. 7　墳丘測量図（1/400）……13・14
Fig. 8　石室正面図および東（右）側土層断面図（1/40）……15
Fig. 9　石室実測図（1/80）……17・18
Fig. 10　石室内出土遺物（1/3）……19
Fig. 11　閉塞部出土遺物（1/3）……21
Fig. 12　前庭部手前（攪乱層）出土遺物（1/3）……22
Fig. 13　朝鮮半島の土器（1/2）……23
Fig. 14　鬼の窟古墳出土須恵器編年図（1/4）……24

表 目 次

Tab. 1　周辺の古墳……3
Tab. 2　数値比較表……6

図 版 目 次

PL. 1 ①古墳全景・調査前（南西から）……29
②古墳近景・調査前（南から）……29
③墳丘測量状況 1……29
④墳丘測量状況 2……29
⑤石室前面，東側調査状況（南から）……29
⑥石室前面，東側土層状況（南から）……29
⑦石室前面，西側調査状況（北東から）……29
⑧墳丘東側，掘削部分（南から）……29
PL. 2 ①石室前面・調査前（南から）……30
②羨道天井石の亀裂状況（東から）……30
③石室内（中室手前から玄室方向を見る）……30
④石室内（中室奥から前室・閉塞方向を見る）……30
⑤前室敷石状況（奥より閉塞方向を見る）……30
⑥中室敷石状況と棺材（奥より前室方向を見る）……30
⑦玄室西壁状況（東から）……30
⑧閉塞部手前の遺物出土状況……30
PL. 3 ①天井石取り外し状況 1（西から）……31
②天井石取り外し状況 2（南西から）……31
③天井石取り外し状況 3（北から）……31
④天井石取り外し状況 4（北から）……31
⑤天井石接着準備状況……31
⑥天井石接着強化材ステンレス丸棒……31
⑦天井石接着状況……31
⑧ステンレス丸棒貫通作業状況……31

PL. 4　①接着した天井石を設置する（南西から）……32
②設置された天井石１（南から）……32
③設置された天井石２（西から）……32
④設置された天井石３（東から）……32
⑤封土崩壊防止用擁壁……32
⑥擬土吹きつけ準備工……32
⑦擬土吹きつけ状況……32
⑧擬土で覆われた擁壁……32
PL. 5　①修復した天井石設置（南から）……33
②修復した天井石設置後（南から）……33
③コンクリートスラブ（17トン）……33
④コンクリートスラブ前面の擬土吹きつけ状況……33
⑤コンクリートスラブ設置状況（南東から）……33
⑥コンクリートスラブ設置後の状況（南東から）……33
⑦コンクリートスラブ設置後（南から）……33
⑧コンクリートスラブと天井石の間隙……33
PL. 6　①石室内出土遺物……34
②閉塞部出土遺物……34
PL. 7　①前庭部手前（攪乱層）出土遺物……35
②朝鮮半島の土器……35

Ⅰ．遺跡の立地と環境

鬼の窟古墳は，長崎県北部の壱岐にあり，行政上は長崎県壱岐郡芦辺町国分本村触に所在し標高100m程の低い丘陵上に占地する。

九州と朝鮮半島の間には30あまりの島々が点在する。なかでも壱岐は対馬とならんで朝鮮半島から九州へ通じた古来からの大陸文化が経由・伝来した地として重要な役割を担ってきた。『魏志倭人伝』にも「広さ三百里平方ばかり，竹林・叢林多く，三千ばかりの家あり。やや田地あり，田を耕せども，なお食するに足らず，また南北に市糴す。」と記され，古くより知られたいわば歴史の島でもある。

島は東西約15km，南北約17km，面積約140㎢程の規模を持ち，標高213mの岳ノ辻を最高に，大半は標高100m前後の低平な丘陵性の溶岩台地で，第三紀層を基盤に表面は玄武岩で覆われている。特に，本古墳周辺の国分一帯は，アルカリ長石を多く含んだ玄武岩溶岩台地帯である。

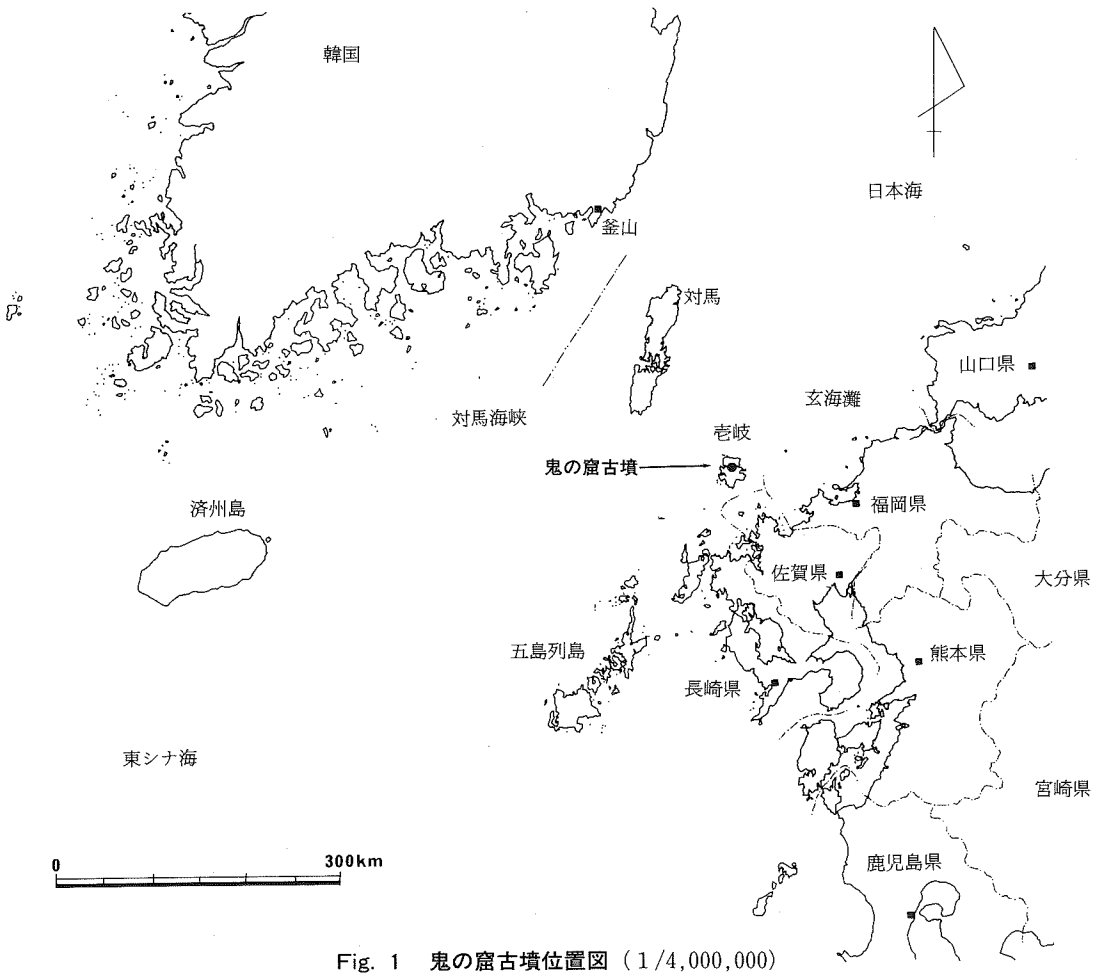


Fig. 1　鬼の窟古墳位置図（1/4,000,000）

現在は郷ノ浦町・勝本町・石田町・芦辺町の4町に行政分けされ，人口約4万人を数える。交通は，対馬～壱岐～博多，壱岐～呼子の海路と壱岐—福岡，壱岐—長崎の空路があり，福岡を中心に佐賀・長崎へ連結する。

鬼の窟古墳は島のほぼ中ほど，芦辺町の西方にあたる。すぐ南側を県道湯本—芦辺線が東西に走り，西へ1kmほど行くと郷ノ浦—勝本間を結ぶ国道382号線へとつながる。

壱岐には今日447箇所[註1]の遺跡が知られている。時代をおって代表的な遺跡を見てみると，先土器時代は原ノ辻遺跡[註2]・興触遺跡[註3]・カラカミ遺跡[註4]が知られている程度で，縄文時代になると松崎遺跡[註5]・名切遺跡[註6]・鎌崎遺跡[註7]が挙げられよう。弥生時代は原ノ辻遺跡とカラカミ遺跡に代表される。

さて，古墳時代にはいると圧倒的に数が増加する。かつては338基[註8]とも383基[註9]とも言われていたが現在確認されているのは263基[註10]である。中でもFig. 2にも示したように亀石を中心とする半径1.5km内ほどの国分本村触・百畑触・布気触・立石仲触にかけた一帯に著しく集中する。

周辺の代表的な古墳を幾つか挙げてみると，本古墳より北北東約150mの所に近接する兵瀬古墳[註11]（30）は，直径約34m，高さ8mを測る円墳である。内部主体は横穴式石室，玄室と前室2つからなる。石室全長は12m，玄室高は2.7mである。笹塚古墳[註12]（9）は二段構築の円墳で直径は，下部では直径66m，高さ12m，上部は直径38m，高さ9.5mを測る。内部主体は横穴式石室で，玄室と前室2つからなる。石室全長は14.8m，玄室高は3.5mである。玄室内には凝灰岩の組合式の石棺がある。掛木古墳[註13]（5）は現在かなりの掘削を受け原形は判然としないが，直径約30m，高さ7mの円墳であったと推測される。内部主体は横穴式石室で玄室と前室2つからなる。石室全長は13.6mを測り，玄室内には凝灰岩の刳抜式家形石棺がある。双六古墳[註11]（15）は前方後円墳で島内最大の古墳である。全長77m，前方部最大幅27m，後円部高5mを測る。内部主体は横穴式石室で，玄室と細長い複室をもつ。対馬塚古墳[註11]（24）も大型の前方後円墳で全長54m，後円部高6mである。内部主体等をはじめまだ不明確な点が多く，今後の調査が期待される。これらの他にも百畑古墳群（8）や布気古墳群（7）・山ノ神古墳群（28）・百田頭古墳群（31）・釜蓋古墳群（32）などの群集墳もある。

古墳時代以降の遺跡としては，壱岐国分寺跡[註14]（33）がある。平城宮造営の初期に使用された軒丸瓦（6284-Aに極めて近い）も数点検出され，当時の豪族であった壱岐直と畿内の関連など幾つかの問題を投じている。中世になると，元冠の弘安の役瀬戸浦古戦場（弘安4年1281）や壱岐国安国寺跡などが挙げられる。また壱岐は，戦国時代の元亀2年（1571）以後は，松浦氏の支配下に入り松浦藩として維新を迎えるに至る。

このように，総じて壱岐は先土器時代から縄文時代にかけては，希薄ながらもその連綿とした歴史を存続させ，弥生時代には，原ノ辻遺跡・カラカミ遺跡の2大遺跡を抱え，続く古墳時代においては圧倒的な繁栄を見せる。今日，壱岐はこれらの歴史の足跡とともに，風光名媚な地の利を活用し，観光の島として脚光をあび多くの人が訪れている。

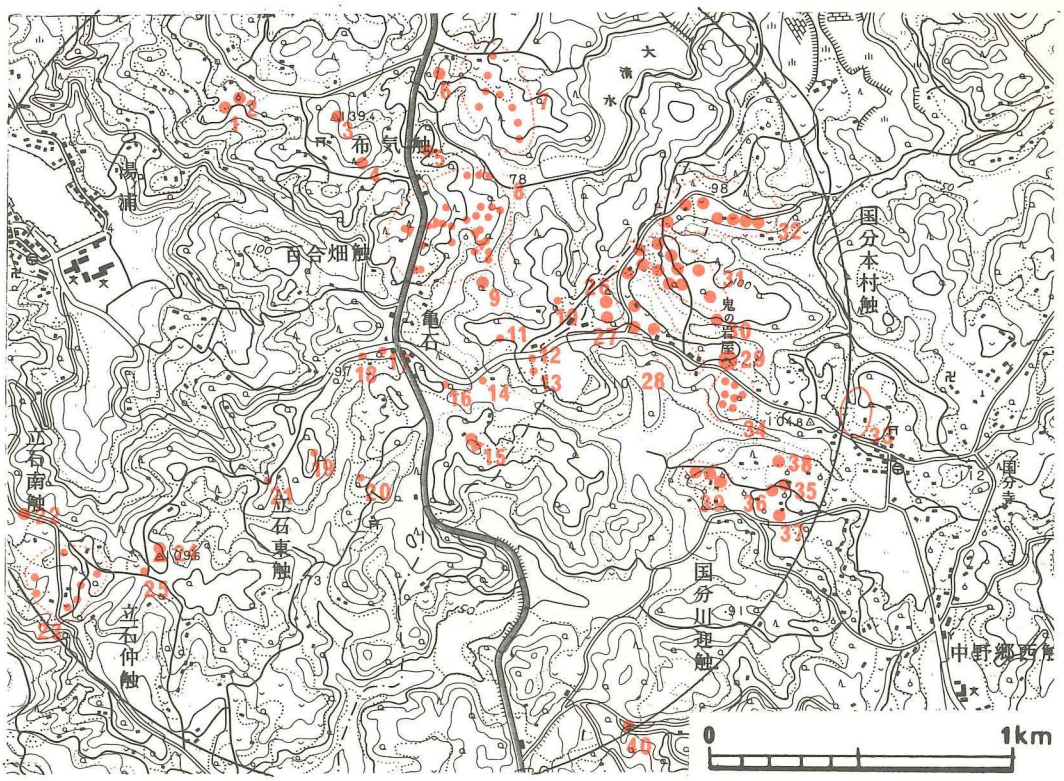


Fig. 2　周辺の古墳（1/25,000）

Tab. I　周辺の古墳

No.	名称	No.	名称
1	水ノ元1号墳	21	亀石1号墳
2	水ノ元2号墳	22	理忠公古墳
3	明神山1号墳	23	若宮神社古墳
4	明神山2号墳	24	対馬塚古墳
5	掛木古墳	25	匹合古墳
6	道元古墳	26	柴取神辻2号墳
7	布気古墳群（1～8号墳）	27	柴取神辻1号墳
8	百合畑古墳群（1～23号墳）	28	山ノ神古墳群（1～5号墳）
9	笹塚古墳	29	鬼の窟古墳
10	城山1号墳	30	兵瀬古墳
11	亀石9号墳	31	百田頭古墳群（1～8号墳）
12	双塚1号墳	32	釜蓋古墳群（1～7号墳）
13	双塚2号墳	33	壱岐国分寺址
14	亀石8号墳	34	京塚山古墳群
15	叉六古墳	35	小原1号墳
16	人羅古墳	36	小原2号墳
17	亀石4号墳	37	カジヤバ古墳
18	亀石5号墳	38	大原3号墳
19	高峰古墳	39	大原古墳群（1・2・4号墳）
20	大石古墳	40	長野古墳

註1　『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書　第87集　長崎県教育委員会　1986

2　水野精一・岡崎　敬編「壱岐原の辻弥生遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』　1957
藤田和裕編『原の辻遺跡』　長崎県文化財調査報告書　第31集　長崎県教育委員会　1977
安楽　勉・藤田和裕編『原の辻遺跡』　長崎県文化財調査報告書　第37集　長崎県教育委員会　1978

3　藤田和裕編『原の辻遺跡』　長崎県文化財調査報告書　第26集　長崎県教育委員会　1976

4　正林　護・宮崎貴夫編『カラカミ遺跡』　勝本町文化財報告書　第3集　勝本町教育委員会　1985

5　『松崎遺跡試掘調査概要報告』　勝本町教育委員会　1979

6　安楽　勉・藤田和裕編『名切遺跡』　長崎県文化財調査報告書　第71集　長崎県教育委員会　1985

7　田中良之・横山　順編「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』№54　九州考古学会　1979

8　『壱岐国続風土記』　1742（寛保2年）

9　『壱岐郷土史』　1721（享保6年）

10　註1と同じ

11　松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐第15号』　壱岐史蹟顕彰会　1981

12　長崎県文化課が平成元年に実施した，「県内古墳詳細分布調査」による。

13　註11と同じ

14　芦辺町教育委員会が調査主体となり長崎県文化課の協力を得て，昭和62年から壱岐国分寺址範囲確認調査を実施。（昭和62年1次調査・昭和63年2次調査・平成元年3次調査・平成2年4次調査予定）

II．整備に至る経過

幕末に編纂された「壱岐名勝図誌」[註1]には，以下の記述が見られる。

「笹窟　巳午向矢櫃鬼屋という。大路より三十間計にあり。……件の窟，国人ハさらなり，諸国の客人見に来る所にて，石面に楽書多し。」

これによると，且つては笹窟もしくは「矢櫃鬼屋」と呼ばれていたらしい。現在では「矢櫃古墳」，「鬼の岩屋」，「鬼の窟古墳」など様々な呼び方をされているが，本書では，史跡指定名称である「鬼の窟古墳」の呼称で統一する。

さて，「壱岐名勝図誌」には，古墳のスケッチとその法量が記載されており，当時の姿を良く今に伝えている。当時から見学者が多かったことと，落書きが多かったことまで現在と同じである。古墳の法量については，現在値との比較表を掲載しておく。計測起点が異なるため全ての数値が一致するとは限らないが，基本的には同一のものと見て良い。

古墳造営にあたっては，壱岐産の玄武岩を石室築造に利用している。その中には巨石27個の使用が認められるが，幾星霜を経た現在，玄室で２枚，羨道入り口で２枚の石にヒビが認められる。今回の事業は，直接的には昭和62年（1987）８月の台風12号による羨道入り口右側壁の崩壊であり，危険防止のための修復が主な目的であった。ただ，これまでも昭和47年（1972）羨道天井石の亀裂にあたって鉄柱とコンクリートによる補強がなされているが，鉄柱腐食が進行しており，合わせて修復の必要性が指摘されていた。なお，「鬼の窟古墳」は，壱岐に残る最大の円墳であることは周知されていたが，これまで古墳の正確なデータとしては昭和45年（1970）九州大学による石室実測図以外は無かったため，修復にあたってはこの際墳丘測量と石室の清掃と実測を合わせて実施することとした。

Fig. 3　幕末頃の鬼の窟

Tab. 2　数値比較表

（1尺＝30.3cmとして計算）

壱岐名称図誌（現，換算値）		計測部位			現在値
廿九間四尺五寸	(54.08m)	墳丘	東西	墳丘	45m（復元推定）
廿間五尺六寸	(38.05m)		南北		45m（復元推定）
七十間	(127.26m)		周囲		約142m
五間壱尺余	(9.4 m)		高		13m
八間半	(14.7 m)	窟入	石室全長		16.5m
四	(4)	間数	石室		羨道＋前室・中室・玄室
九尺六寸余	(2.9 m)	奥間	東西	玄室	3 m
九尺八寸	(2.97m)		南北		3.2m
九尺六寸	(2.9 m)		高		3.3m
七尺六寸	(2.3 m)	次間	東西	中室	2.4m
壱丈三尺	(3.93m)		南北		4.1m
五尺	(1.51m)		高		1.75m
六尺六寸	(1.99m)	三の間	東西	前室	2m
壱丈三尺	(3.93m)		南北		4.1m
五尺六寸	(1.70m)		高		1.9m
六尺	(1.82m)	表間	東西	羨道	1.8m
壱丈九尺五寸	(5.91m)		南北		5.1m
四尺六寸	(1.39m)		高		1.8m
八尺二寸	(2.48m)	口	高	入口	2.4m
六尺二寸	(1.88m)		幅		1.9m
八尺	(2.42m)	矢櫃石	長	石棺	2.55m
土より出所二尺	(0.6 m)		幅		0.75m
五，六寸	(0.15～0.18m)		厚		0.13m

註1　後藤正恒・古野尚盛「壱岐名勝図誌」上・中・下（文久元年1861）　名著出版　昭和45年（1975）

Ⅲ．整備の目的と方法（Fig. 4，PL. 4～6）

先述した如く，今回の事業は①羨道天井石ならびに側壁の修復，②修復した天井石の保全，③羨道入り口付近の封土崩壊防止，④既設の鉄柱およびコンクリート除去，⑤古墳墳丘の測量ならびに石室の清掃と実測，⑥植栽などの修景，⑦照明施設の設置の７点を行う環境整備事業であった。順を追って説明を加えておく。

①羨道天井石ならびに側壁修復

羨道天井石にはかなり以前から亀裂が生じていたものと思われる。それが目立つようになったのが昭和47年頃であり，この古墳が県指定文化財であることと，見学者が多いことから安全性の面からもとりあえずコンクリートと鉄柱による保全処置が講じられた。しかし，水の侵食によって天井石周囲の土が大きく流失していることと，加えて鉄柱の錆が進行したことで再保全の必要があった。天井石は完全に割れており，その修復にあたっては石そのものを変えることも検討したが，技術的に可能であるなら，なるべく当初の石材を再利用した方が良いとの指導もあり，強化接着させることになった。石は接着させた後，補強のためのステンレスの棒を３本貫通させることとした。修復材料は次のとおりである。

接着剤	アラルダイト（主剤）	AW—106	7 kg
	ハードナー　（硬化剤）	HV—953	7 kg
補強用ステンレス丸棒（50㎜×３m）			2本

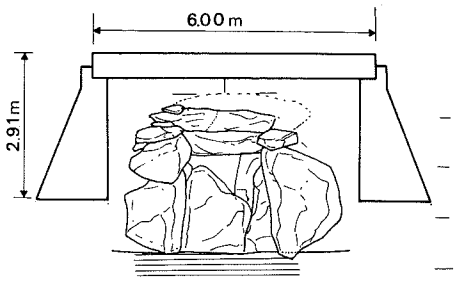
天井石の重量は５ｔ位と予想されたため，その取り除きならびに据付けには25ｔクレーン車を使用した。計測の結果は７ｔであった。この石は使用石材の内，特に大きいものでは無い。修復後の天井石の据付けにあたっては，他の側壁材も樹脂で強化して固定させることとした。

使用材料は以下のとおりである。

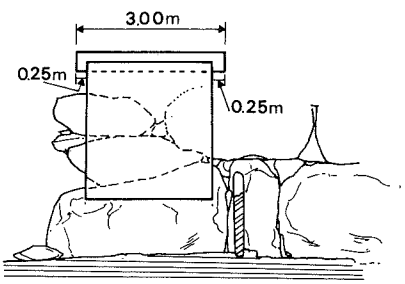
接着剤	アラルダイト（主剤）	エポキシ系	GY—1252	20kg
	ハードナー　（硬化剤）	エポキシ系	HY—837	8 kg
	サイト	エポキシ系	FX—20R	16kg
	サイト	エポキシ系	FX—20H	8 kg
	サンコール	イソシアネート系	SK—40	7 kg

②修復した天井石の保全（Fig. 4）

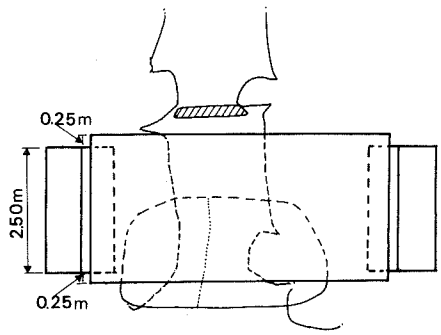
修復した天井石の上には，流出した封土の補塡が必要であった。その方法としては，重量負担を軽減するためにFRP製の擬土の塊を乗せ，その上に薄く土をかけて保全する予定であったが，接着強化した天井石でも長期的には負担に耐えられないとの指摘が，土木工学の専門家からなされた。このため，天井石の上に土受けのためのコンクリートスラブを設置することとし



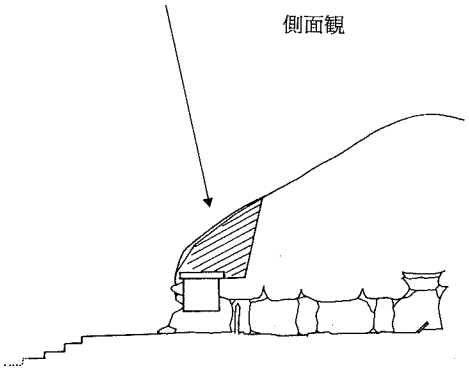
正面観



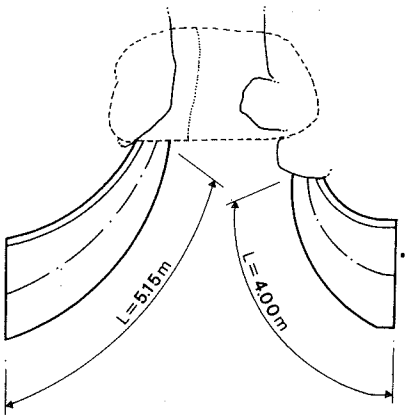
側面観



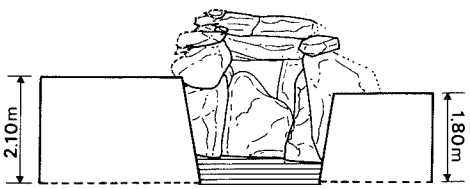
上面観



（重力式擁壁工）



上面観



正面観

（崩壊防止擁壁工）

Fig. 4　修復・整備の方法

た。コンクリートスラブの大きさは，6m×3m×0.4mで設置後の正面観は鳥居形となる。ただし，コンクリート面は擬土と土で被覆するため，表面に露出することはない。

③羨道入り口付近の封土崩壊防止（Fig. 4）

封土はもともと急角度で築かれていたらしく，古墳全周にわたって崩落が認められ，土砂の流失も多い。石室入り口部分も，両側共大きく崩れて旧状を留めていないばかりか，なお進行中であった。このため，流失した土砂を補塡してもそのままでは再び流失することは確実であり，何らかの保護処置が必要であった。

検討の結果，土砂流失防護方法として，地面からある程度の高さまでコンクリート擁壁を築くことにした。この場合もコンクリート表面には擬土を吹き付け，その前面を土で被覆することでコンクリートの露出を防ぐこととした。

④，⑤については後述する。

⑥修景・植栽

復旧後の盛土法面上には，修景と崩壊防止の為以下の植栽を行った。

やぶツバキ（樹高1.2m）	10本
高麗芝	15m²
さつき（樹高0.3m）	50本
冬型混合種子吹き付け	26kg

⑦照明設備

これまでは，見学者用に懐中電灯を石室入り口に用意していたが，今回の整備を機に，ミニハロゲン電球用投光器を2台常設することとした。

一個の天井石修復と台風12号がもたらした壁面崩壊の修復費用は以下のとおりである。決して安い額では無い。悠久の文化財に対する保存と啓蒙にいささかの理解が得られれば幸いである。

天井石修復・保全	8,337,850
崩壊防止（擁壁）	525,300
説明板（ダイヤプレート1基）	349,170
修景・照明施設（植栽を含む）	778,680
事務費（調査・報告書作成費を含む）	640,000
計	10,631,000（消費税込み）

※ 経費は県と町で負担した。

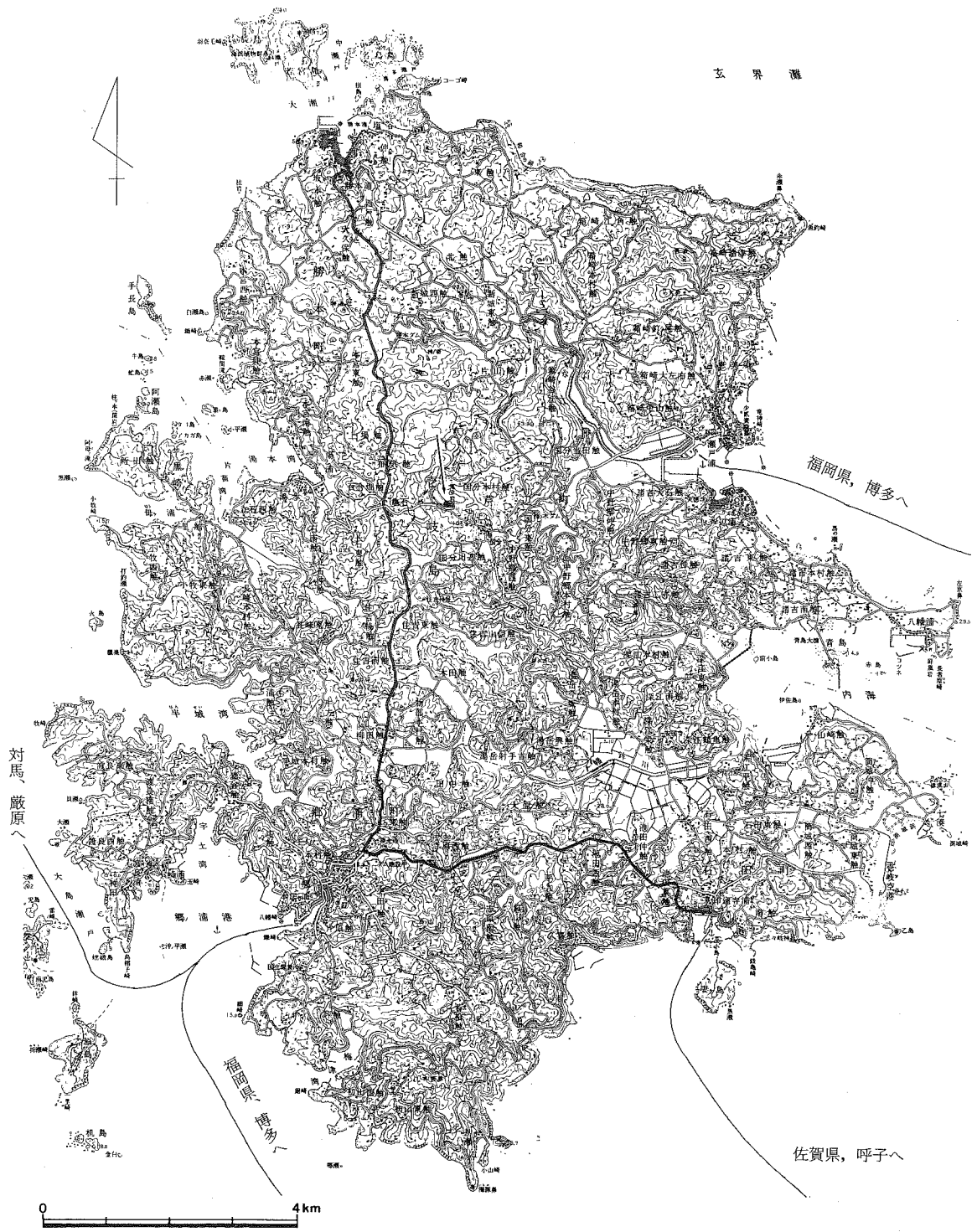


Fig. 5　壱岐（1/100,000）

Ⅳ. 調　　査

1．墳丘（Fig. 6，PL. 1・2）

鬼の窟古墳は，亀石を中心とした壱岐の古墳密集地帯の東側一帯に位置する。周辺の地形をみると，低くなだらかな丘陵上に築造されていることがわかる。浅い谷を挟んだ北方には兵瀬古墳が控え，すぐ南方には京塚山群集墳が近接する。古墳は古くより多少の崩壊はあったものの，昭和62年（1987）8月の台風12号の被害により正面上部を大きく欠損した。調査前は裾部付近は竹林で，墳丘上は椿や椎の木を主体にした雑林であった。

調査は先ず竹林や雑林の伐採作業から行ったのであるが，この地は「壱岐対馬国定公園」内でもありしかも防風林としての役目をもつということで，関係機関との協議の後，許可を得て必要最小限の伐採に留めた。また，天井石を含む石室入口前面の修復工事に伴い墳丘の一部が掘削されることから，盛土の状況などを確認するため石室前面の調査も行った。

なお，墳丘の南西ぎわに四角状に積石をなしその上に立石をもつ古墓が数基みられるが，明確な資料や伴出する遺物もなく，現段階では判然としない。本古墳より道路に沿って南東約300mの所に江戸時代の墓地である京塚遺跡があり，そのなかに酷似するものがみられる。何等かの関連または同様の墓地と考えられる。

墳丘の規模（Fig. 7，PL. 1・2）

墳丘の測量は，50cm間隔を等高線として行った。等高線の状況からもわかるように，若干西側部分がゆるやかであるが，全体的に墳丘の傾斜は見た目よりきつく，かなりの盛土がなされていることがうかがえる。また，裾部は西側の一部を除いてほとんど崩壊と掘削を受け北側から東側一帯にかけては崖のようになり4mを越える所もある。墳丘の北側一帯は現在ヒノキなどの植林がなされており，この部分の掘削は以前畑地だった頃に受けたものであろう。以上のことから考えて本古墳はFig. 7にも図示したように，直径45m，高さ13mを測る，堂々たる規模の大円墳であることがわかった。周溝などの外部施設は認められない。

盛土の状況（Fig. 8，PL. 1）

石室入口の崩壊部を中心に調査したところ，明褐色粘質土や黒褐色土を主体とした，細やかな版築状の盛土が確認された。版築状の盛土は左右に認められたが，西（左）側部分は木の根などによりかなり深くまで攪乱がはいり不鮮明な状況であった。東（右）側部分はかなり明確に認められ，築造における行程や方法の一端がうかがえた。順をおって述べると次のような築造過程が想定される。

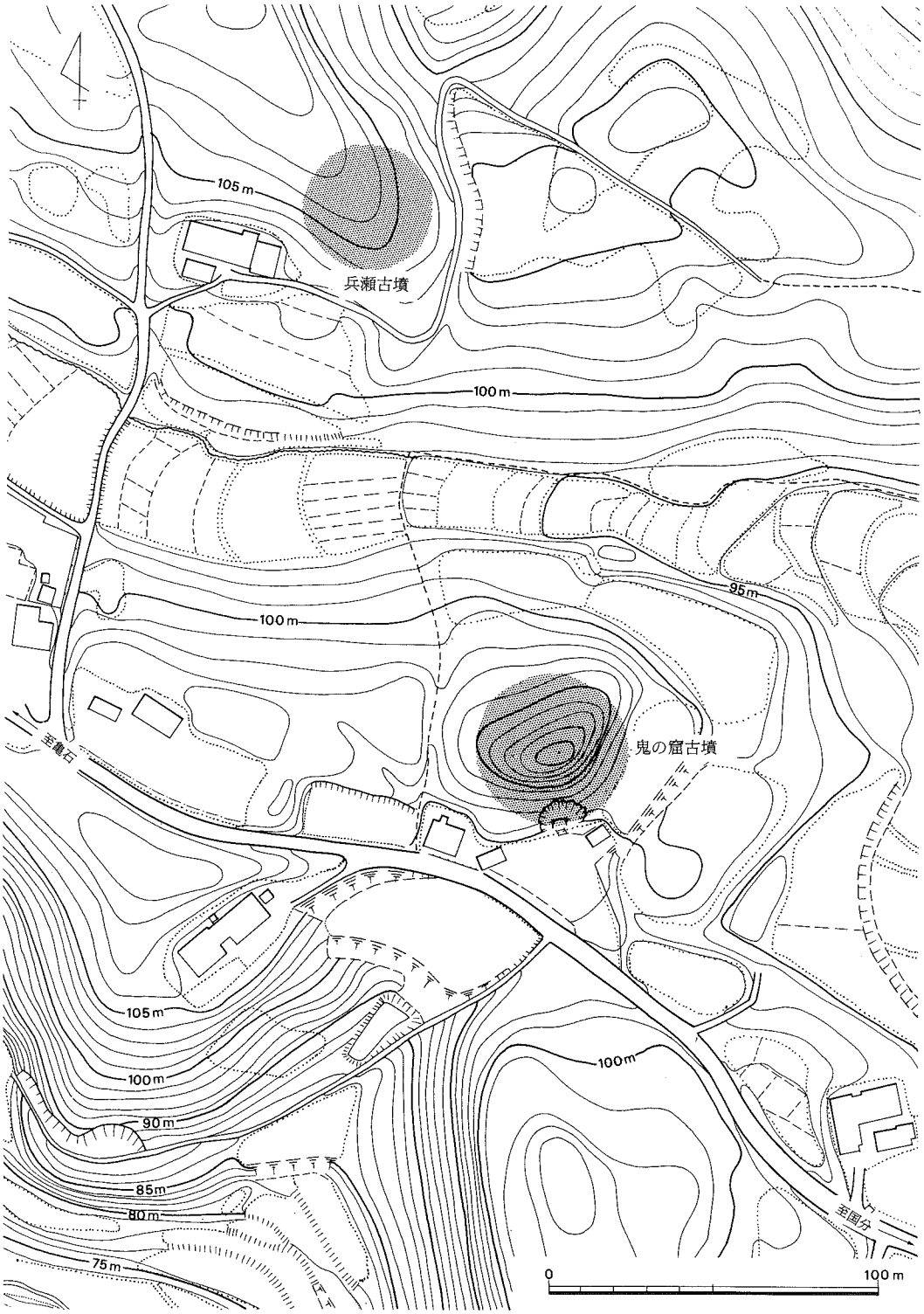


Fig. 6　遺跡周辺地形図（1/2,000）

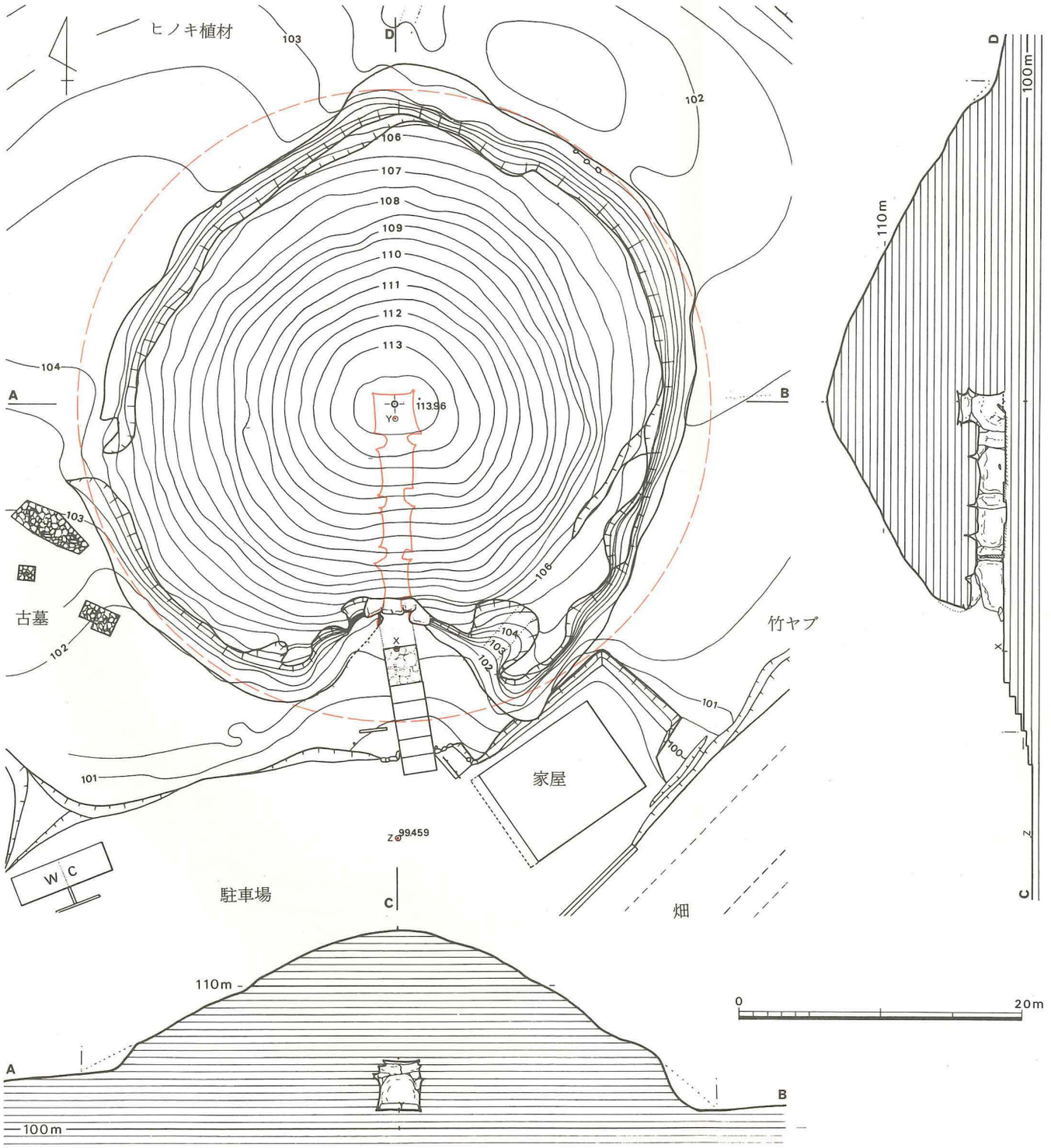
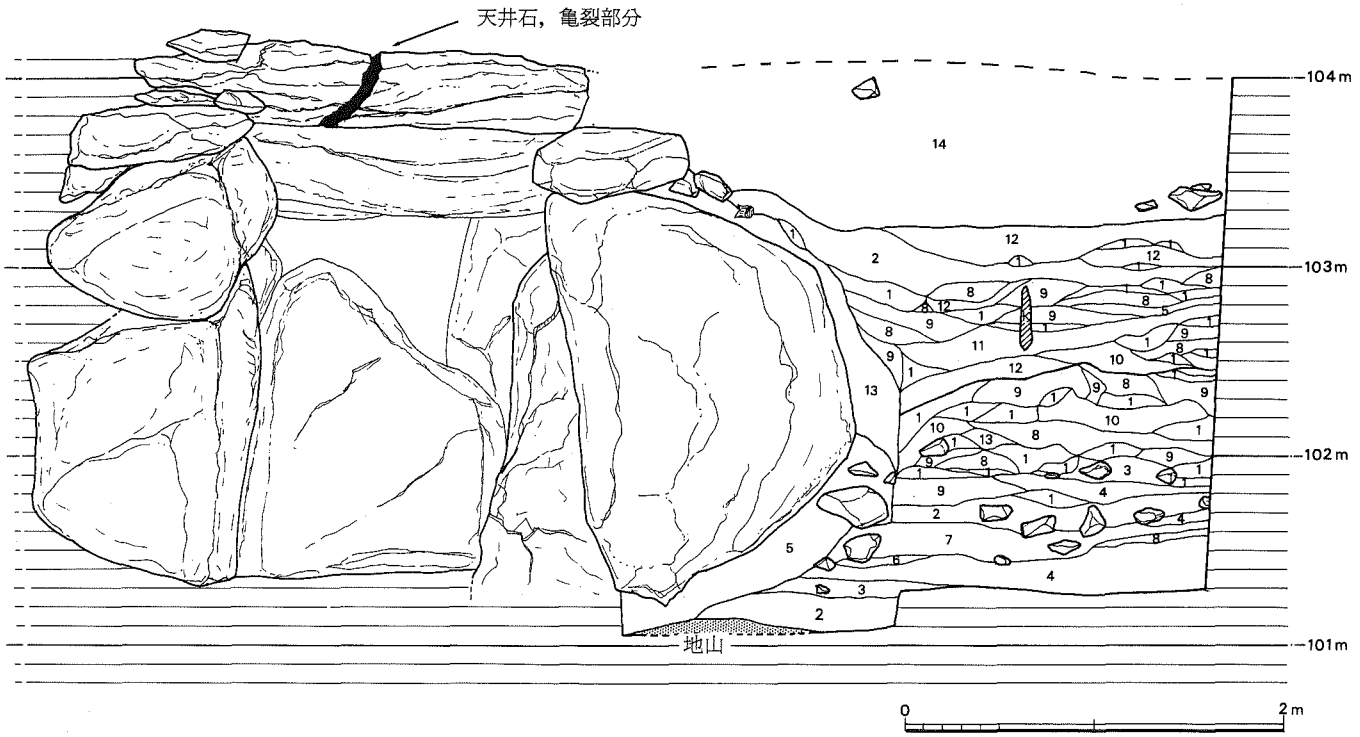


Fig. 7　墳丘測量図（1/400）



1層—明褐色粘質土
2層—黒褐色土（固くしまる）
3層—明褐色土（固くしまる）
4層—混風化細礫褐色土（固くしまる）
5層—黒褐色土（フカフカしている）
6層—混風化細礫黒褐色土（固くしまる）
7層—混風化細礫明褐色土（固くしまる）
8層—赤褐色土
9層—暗赤褐色土
10層—灰褐色土
11層—暗赤褐色土（9層よりややにぶい）
12層—明赤褐色土
13層—暗赤褐色土（12層より軟かい）
14層—明褐色土（3層に似るがしまりに欠ける）
K—撹乱（木の根等による）

Fig. 8　石室正面図および，東(右)側土層断面図（1/40）

1．地山（基盤）は多少掘り込む程度で，ほとんど平坦に近い状況を基礎とする。
2．先ず90cm程の高さまで大まかな盛土を行い，その上に5～10cm程の厚さに版築状の盛土をのせる。上面はやや斜めぎみになっている。
3．袖石・腰石を設置し石室の側面を組み，隙間に土を入れる。
4．同じく5～10cm厚みで版築状の盛土を，高さ2m程の位置まで行う。
高さは側面がほぼ埋まる程度，もしくは天井石の下程の高さにあたる。
同時にこの段階では石室内部にも土を充塡していたと考えられる。
5．天井石をのせ，盛土を行う。そして，石室内の土を取り出す。
更に，天井石上部はアーチ状に5～10cm厚みの版築状の盛土が確認された。
（14層は表面の風化土の可能性が高く，奥には版築状の盛土があると考えられる。）

以上のように古墳の築造にあたってはかなり丁寧かつ壮大なスケールで行われたことが察せられる。また，次に述べる内部主体の玄室部分は墳丘の頂上部真下にあたり円の中心部をなす。緻密な計算の上になりたって行われたとは十分に推測されるところである。

2．主体部（Fig. 9，PL. 3）

内部主体は，主軸をN-7°-Eでほぼ南に開口する。前室・中室・玄室の三室からなる両袖式の横穴式石室である。石室はいずれも巨大な石を使用しており，全長は16.5mを測る。床面は図面（Fig. 9）からもわかるように，本来は全面には敷石が施されていたものであろう。なお，天井石の幾つかには亀裂が生じ，漏水があり3ケ所程水溜まりも認められた。

玄室は，奥壁幅2.9m，玄門側幅3.3m，左側壁2.8m，右側壁3.0m，天井高3.3mの規模を持ち平面形は多少歪むものの一辺約3m程の正方形に近い形状を呈すると言えよう。周壁上部にはそれぞれ持ち送りが見られ，奥壁より左右の側壁が内傾は顕著である。玄門は，袖石が左壁から0.8m，右壁から0.9mを突出させ1.4mの幅を有する。敷石はやや大きめの石を使用するが，漏水によりかなり軟質化し角が取れ丸味を帯びる。玄室内には棺材の一部と考えられる長さ2.55m，幅0.75m，厚さ0.13mの長方形の板石が奥壁手前0.8m程の位置に奥壁に平行して斜め（この時点では約40°傾く）におかれている。また，中室内にも同様の板石があり組合式石棺であったことが考えられる。

中室は，玄門側幅2.6m，前室側幅2.1m，左側壁3.3m，右側壁3.0m，天井高1.9m前後を測る。玄室と同様に若干歪んだ感じをうけるが羽子板状の平面形をもつ。前門は，袖石が左壁から0.6m，右壁から0.7m突出させ，1.1mの幅を有する。また，長さ1.40m，幅1.1m，厚さ0.18m程の板石があり石棺の一部と考えられる。敷石は比較的大きめで部分的に欠落が認められる。

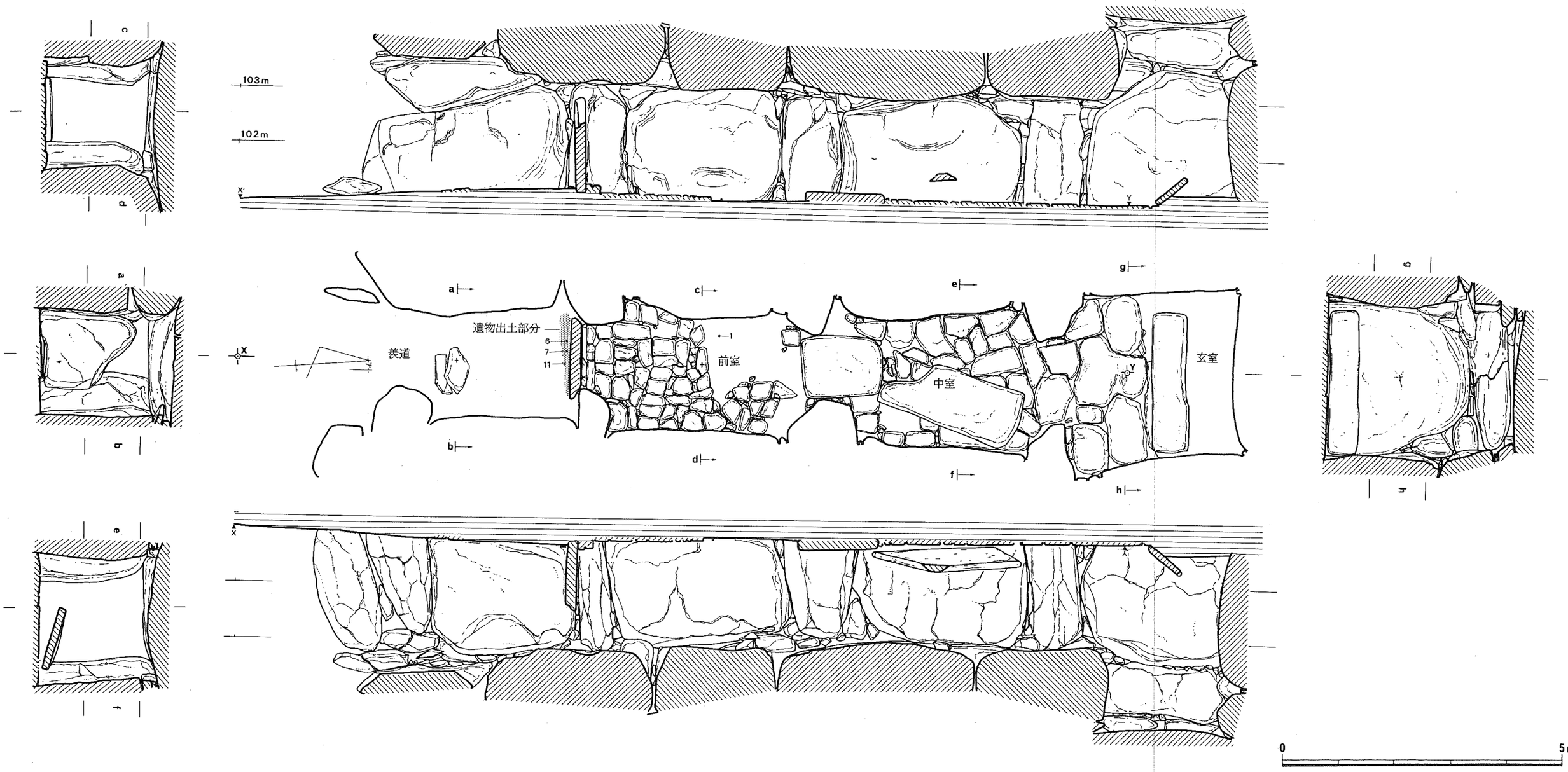


Fig. 9　石室実測図（1/80）

前室は，中室側幅2.2m，羨門側幅2.3m，左側壁2.9m，右側壁3.2m，天井高は中室同様1.9mを測る。両壁は長さもだいたい同じでほぼ平行する。羨門は，袖石が左壁から0.4m，右壁から0.7m突出させ，1.1mの幅を有する。敷石は小さめでしっかりと敷かれていたと考えられるが一部は大きく欠落し水溜まりとなっている。須恵器杯蓋の小片が一点出土している。

羨道は，右側壁手前に袖石状の石を二つ置くが，左側壁にはない。羨門側幅1.9m，前庭部側幅1.9m，左側壁幅3.2m，右側壁幅2.6mで両壁は平行する。天井高は前庭部へ行くに従って高くなり1.9～2.4mを測る。床面の敷石は認められないが中央に敷石を思わせる二枚の板石が見られ全面に敷かれていた可能性も考えられる。

閉塞は高さ1.7m，幅1.4m，厚さ0.12m程の板石で行われているが右上方が欠損しておりその部分より容易に出入りすることができる。閉塞石の裾部は多少土が堆積しており，除去したところ，入口部からは須恵器の杯蓋や杯身・甕等が30片程出土し，裏側はやや角ばった石でしっかりと固定されている状況が認められた。

3．遺　物（Fig. 10～13, PL. 7・8）

遺物は石室内・閉塞部・前庭部手前の3ケ所から，およそ40点が出土した。須恵器の小片が多く，他に土師器片や黒色土器片も数点認められる。全体に幾つかの時期のものが混在しており，層位や出土場所などにおいて明確な分類ができる状況ではなかった。

石室内出土遺物（Fig. 10, PL. 7）

石室内は古くより開口し，当然盗掘を受けているものと考えられる。床面の敷石確認も兼ね，薄く堆積した黒色土層の除去を行ったところ，前室の敷石が欠落する部分に須恵器杯蓋の小片が1点出土した。**1**は，口径12.5cm，器高4.0cm程で丸味をもつ天井部から口縁部にかけて多少凹凸しながらゆるく外反する。口縁端部は若干ふくらんで丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削りで，他は回転ナデ調整を施す。焼成は良好で，内外断面ともに淡灰褐色をなす。胎土には細かな砂粒が混入する。

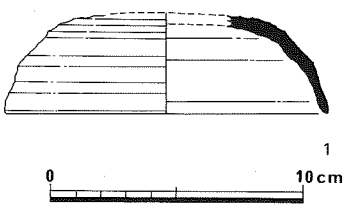


Fig. 10　石室内出土遺物（1/3）

閉塞部出土遺物（Fig. 11, PL. 7）

閉塞石直下には暗褐色土層堆積があり，除去したところ約30点の遺物が出土した。今回の調査における出土遺物はここからの須恵器片が大半を占め，他に土師器片や黒色土器片も出土をみる。中でも杯身（**6**・**7**）と甕（**11**）は，欠損部も少なく接合によりほぼ原形が復元できた

もので，3点が並ぶように出土した。追葬時などの原位置をとどめている可能性も考えられる。

2～**4**は須恵器杯蓋で4点とも口縁部内面にかえりをもつ。**2**は1/4程の破片で口径9.0cm，器高3.1cm，かえり部径7.0cmを測る。丸味をもつ天井部からゆるやかに口縁部に下がり，口縁端部は丸くおさまる。内面には比較的に薄手のかえりをもつ。かえりはほぼ直立するが口縁端部より下には張り出さない。また，天井部中程は丸く欠損しており，つまみがあったものと考えられる。天井部外面は多少回転ヘラ削り，内面は一定方向のナデ調整が施され薄くなっている。他は内外とも回転ナデ調整である。焼成はやや良好で，外面と断面は淡灰色、内面は暗灰色をなす。細かな砂粒が微量混入する。**3**は小片が3点接合したもので，おおよその器形・規模は判断できた。口径10.5cm前後，器高2.5cm前後，かえり部径9.0cm前後を測るものと想定される。丸味の天井が考えられ，口縁端部は丸くおさまる。かえりは比較的にしっかりとつくられ端部に若干届かない程度である。本破片では内外とも回転ナデ調整しかわからない。焼成はやや良好で，内外断面とも淡灰色をなす。砂粒が微量に混入する。**4**は1/5程の破片で，口径10.0cm，器高2.0cm，かえり部径8.0cmを測る。丸味をもつ天井部からゆるく下がり口縁端部は丸くおさまる。天井部は薄く内面に若干の一定方向のナデ調整があるほかは，内外とも回転ナデ調整しかわからない。焼成はやや良好で，外面は淡灰色，内面は暗灰色，断面は薄いあずき色をなす。細かな砂粒が微量に混入する。**5**は口縁部の小片で器形・規模は正確には判断しにくいが，口径12cm前後，器高3.5cm前後が想定される。口縁端部は丸くおさまり，丸味の天井が考えられる。かえりはごく小さく，端部より下には張り出さない。焼成は良好で，内外断面とも淡灰色をなす。

6～**10**は須恵器杯身で**6**～**9**は受部をもつ。**6**は一部を欠損するのみで口径11.8cm，受部径14.5cm，器高4.3cm，たちあがり高1.0cmを測る。若干いびつで厚い底部から低く外反し，やや鋭く内傾する。受部は短く外上方に張り出す。たちあがりは多少外反しながら内傾，端部は丸くおさまる。体底部外面は回転ヘラ削りで，他は内外とも回転ナデ調整が施される。焼成はややあまく，外面は暗灰色，内面は灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。細かな砂粒が混入する。**7**は数点の接合により原形近く復元できたもので口径9.6cm，受部径11.7cm，器高3.6cm，たちあがり高0.8cmを測る。体部外面に大きく屈曲部をもち，低く外反しながら内傾する。受部は短く外上方に張りだし，内側に浅い沈線状の凹みをもつ。たちあがりは外反しながら内傾，端部は薄めに丸くおさまる。体底部外面は回転ヘラ削りで，その上にヘラ記号がある。他は内外とも回転ナデ調整が施される。焼成はあまく，外面は部分的に褐色で，内面は灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。やや大きめの砂粒の混入がみられる。**8**は受部付近の小片で，口径10cm前後，受部径12.5cm前後，器高4cm前後のものと想定され，たちあがり高は0.8cmを測る。丸味をもつ底部から内湾ぎみに開きながら内傾すると考えられる。受部は若干ふくらみ，外上方に張り出す。たちあがりはごくわずかに外反しながら内傾，端部は丸くおさまる。内外とも回転ナデ調整を施す。焼成はあまく，内外断面とも淡灰褐色をなす。細かな砂粒が微量混入する。**9**

は小片で口径8.5cm前後，受部径10.5cm前後，器高４cm前後，たちあがり高0.8cmを測る。丸い底部から内湾しながら上方へ伸び，受部近くで若干開き，受部は短く外上方に張り出す。たちあがりはほぼ直立し，尖りぎみに丸くおさまる。体底部外面は回転ヘラ削りが小さく丁寧に施されカキメ状になっている。内面天井近くは不正方向のナデ調整，他は回転ナデ調整が施される。焼成は良好で，内外断面ともに灰褐色をなす。細かい砂粒が微量混入する。**10**は３点接合で１／２程になる無高台の杯身で，口径9.0cm，器高3.8cmを測る。丸味をもった底部から多少外傾しながら上方へのび，端部は丸くおさまる。体底部外面には約６㎜幅の回転ヘラ削りが丁寧に数重施され，他は内外とも回転ナデ調整される。焼成は良好で，内外ともに暗灰色，断面はあずき色をなす。細かな砂粒が微量混入する。

11は体底部に脚付瑯で，口径10.6cm，器高14cm前後，最大胴径8.0cmを測る。径5.5cm程のラッパ状に大きく外反する頸部と径3.5cm前後の「ハ」の字形に開く脚をもつ。胴部径は口縁部径より小さく比較的に小型である。口縁端部は丸くおさまるが，脚端部は欠損するため不明である。胴中部から脚の付け根部にかけて回転カキメが，胴部上部には回転カキメの上にヘラによる連続の刺突文が施される。他は全体に回転ナデ整形である。焼成は良好で，内外ともに灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。細かな砂粒が微量混入する。

12は黒色土器で内外両面とも燻す。口縁部片で４点接合し，径15.5cm，器高5.5cm前後を測る

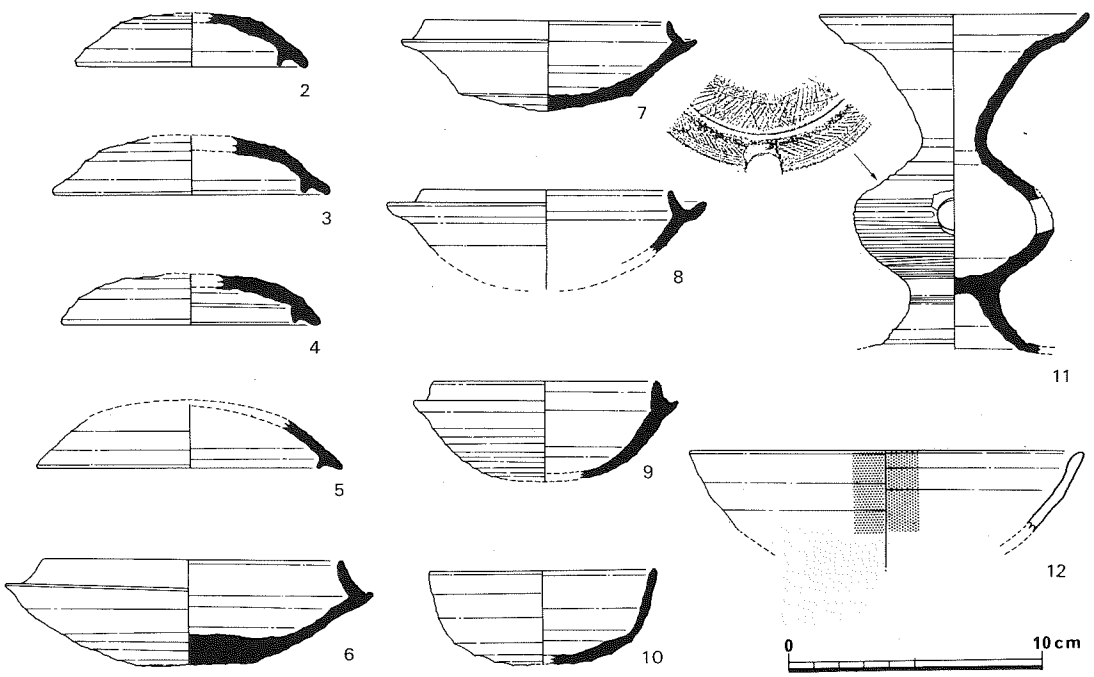


Fig. 11　閉塞部出土遺物（１／３）

ものと推定される。口縁端部は内面が若干ふくらみ丸くおさまる。調整は内外ともに横ナデが施され，内面はその上に丁寧な研磨が行われている。

前庭部手前（攪乱層）出土遺物（Fig. 12, PL. 7）

現在，古墳下の駐車場から石室の直前までコンクリートの階段が設けられ容易に見学できるようになっている。今回の調査で，前庭部付近の状況を確認するために階段部分を避け掘り下げてみたが既に攪乱されていた。何等の遺構も検出できなかったが，須恵器片など数点の遺物が出土した。

13・14は須恵器杯身である。**13**は小片で口径12cm前後，受部径15cm前後，器高４cm前後，たちあがり高1.1cmを測る。丸味の底部から低く内湾ぎみに開く器形が想定される。受部は薄くて短く外上方に張り出す。たちあがりは外反しながら内傾，端部は丸くおさまる。回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく，内外断面とも灰褐色をなす。砂粒が多少混入する。**14**は１/３程のやや大きな破片で，口径12.0cm，受部径14.0cm，器高4.0cm，たちあがり高0.8cmを測る。丸味の底部から低く内湾しながらゆるく開く。受部は短く外上方に張り出し，内側に浅い沈線状の凹みをもつ。たちあがりは若干いびつに内傾，端部は尖りぎみに丸くおさまる。器壁には焼きぶくれがあり，底部が凸状になる所もある。体底部外面は回転ヘラ削りで，他は内外とも回転ナデ調整が施される。焼成は良好で，外面は暗灰色，内面は灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。細かな砂粒が混入する。

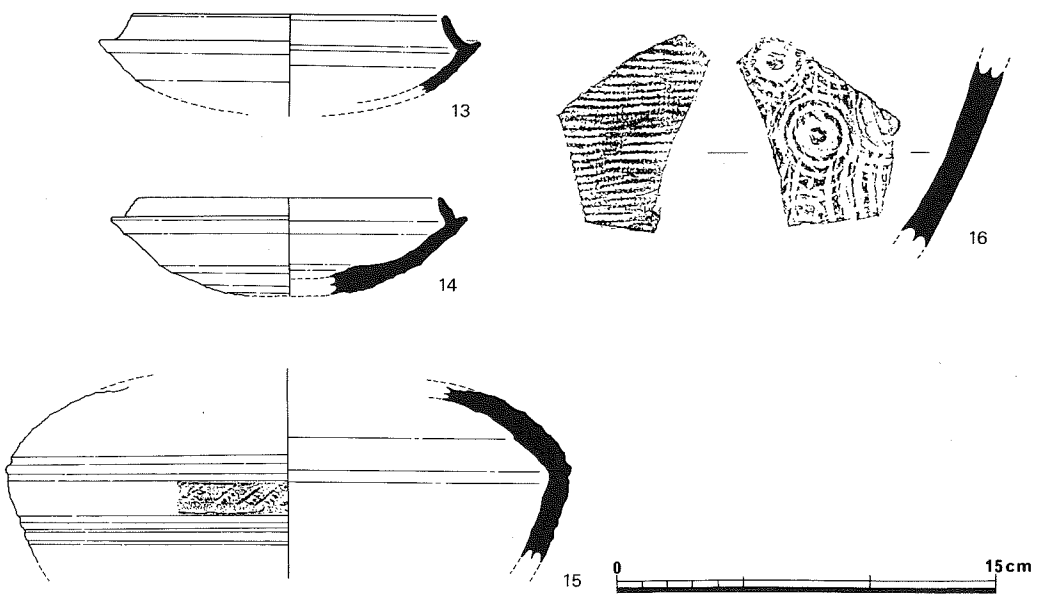


Fig. 12　前庭部手前（攪乱層）出土遺物（１/３）

15は須恵器壺の破片と考えられる。器形は判然としないが角ばらない程度に肩の張ったもので，胴部径が約22cm前後の壺が想定される。胴部下半に櫛による連続の刺突文が施され，その上下に数条の横方向の沈線がはいる。胴部上半には淡灰色の自然釉が一面にかかる。焼成は良好で，外面は暗灰色，内面は淡灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。16は須恵器甕の胴下半部の小片と考えられ，器厚1.2cmを測る。外面は横位のタタキを施し，内面は同心円の当具痕をみる。焼成は良好で，内外は灰褐色，断面は薄いあずき色をなす。

朝鮮半島の土器（Fig. 13, PL. 8）

17・18の2点は朝鮮半島の陶質土器の小片である。どちらも器形や規模は判然としないが類例資料から壺が想定されよう。17は3cm四方の台形状の破片で厚さ0.6cmを測る。壺胴上部，頸部直下の部分と考えられる。外面は三角集線[註1]文の下に1条の横位沈線がはいりさらに点半円文が施文され，一面に淡緑灰色の自然釉がかかる。内面は横ナデ調整が施され，一面に鮮やかな水銀朱が認められる。焼成は良好で，断面は灰褐色をなす。閉塞部から出土。18は3cm程の三角形状の破片で厚さ0.5cmを測り，壺の胴上部分と考えられる。外面は三角集線文の下に3条の横位方向の平行沈線がはいり，さらに同心円文が施文される。内面は横ナデ調整が丁寧に施される。焼成はややあまい感じがし，内外断面とも灰白色をなす。石室前の攪乱層から出土。

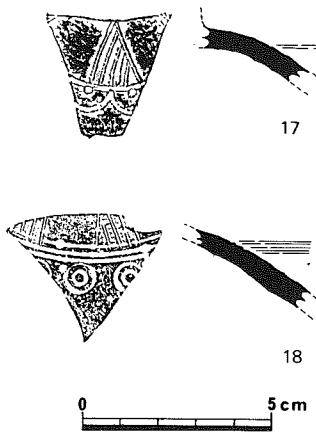


Fig. 13 朝鮮半島の土器（1/2）

4．まとめ（Fig. 14, PL. 7・8）

鬼の窟古墳は，壱岐郡芦辺町の西方ほぼ島内中央に所在する大型の古墳である。昭和36年に県史跡に指定され，今日も島の内外から多くの観光客が訪れ親しまれている。しかし，長年の風雨などにより羨道の天井石に大きく亀裂が生じたため，鉄柱とコンクリートで補強がされていた(昭和47年)。加えて，昭和62年8月の台風12号被害により石室前面が大きく崩壊し，かなり危険な状態であったため，今回の修復工事実施に至った。また，修復に先だって墳丘および石室の調査も行い，壱岐の古墳調査に新たな資料が蓄積されることとなった。

本古墳は，直径45m，高さ13mの大型の円墳で壱岐島内はもちろん県内でも最大級の円墳であることが判明した。周溝等の外部施設の検出はなかった。裾部は多少掘削を受け場所によっては崖状になる所もある。

内部主体は，主軸をN-7°-Eにとり，ほぼ南に開口する。巨石を使用した両袖式の横穴式石室で前室・中室・玄室の3室からなる。石室の全長16.5mで，玄室は約3m四方で正方形状の平面形をもち天井高3.3mを測る。玄室の周壁上部には持ち送りが認められる。床面は3室とも敷石が施されるが，部分的に欠落している所もある。内部には数ケ所の亀裂があり漏水が認められる。玄室・中室には棺材の一部と考えられる板石があり，組合式の石棺であったことが察せられる。

出土遺物は，ほとんどが須恵器で約40点を数える。他に，土師器・黒色土器が数点，朝鮮半島の陶質土器小片も2点出土する。出土地点は閉塞部からが大半を占め，他は前室・前庭部手前の攪乱層からである。須恵器は杯の蓋・身を中心に甕・壺もみられる。

さて，次に出土した須恵器について多少の検討を加えてみたい。ここでは小田富士雄氏の編年を参考にした。杯蓋は5点の出土があり，内**2・3・4・5**は閉塞部からの出土である。4点とも丸味をもつ天井部からゆるく下がり口縁端部は丸くおさめ，口縁部内面に端部より下には張り出さない共通点をもちV期におさまるものと考えられる。残る1点は唯一前室床面から出

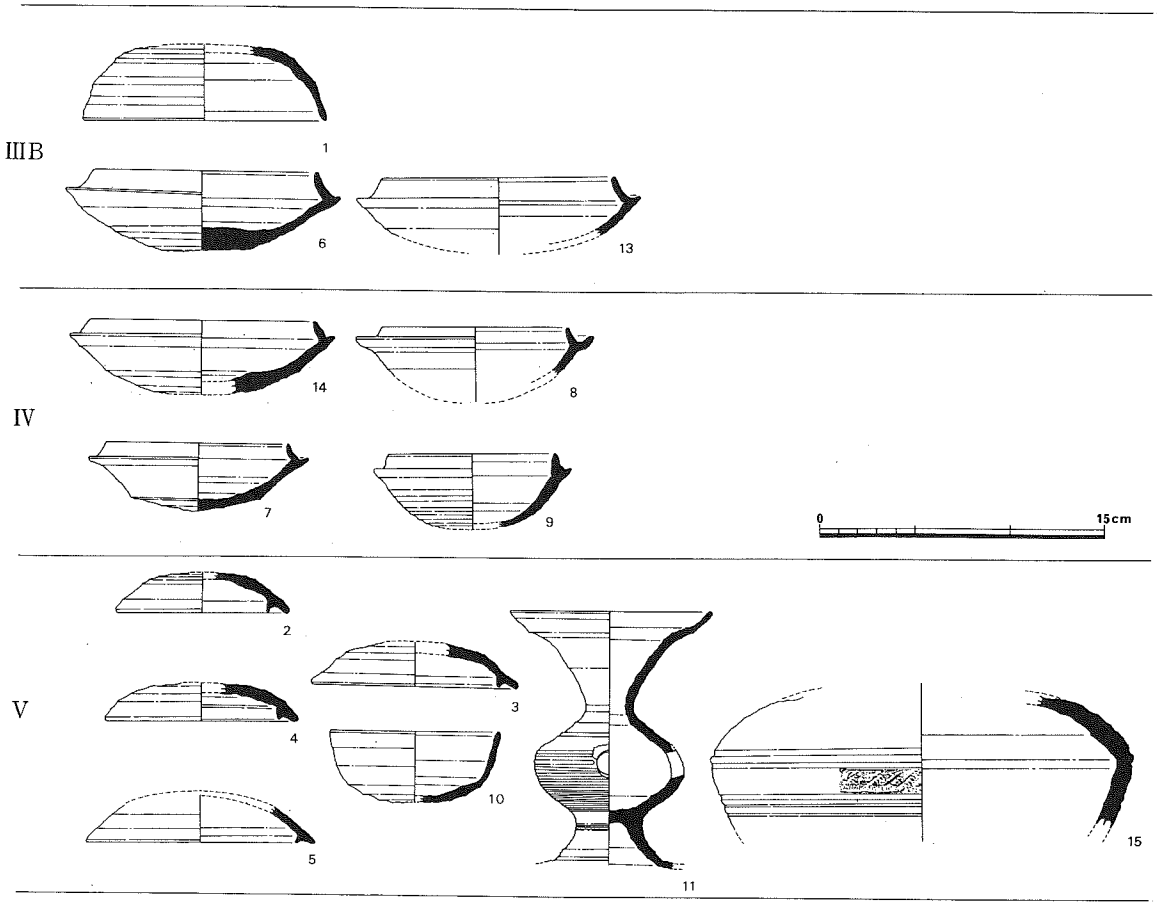


Fig. 14　鬼の窟古墳出土須恵器編年図（1/4）

土したかえりをもたないもので，やや古くIIIB期に相当しよう。杯身は，閉塞部より**6・7・8・9・10**が前庭部手前攪乱層より**13・14**の7点が出土する。**6・13**の2点は出土地点はそれぞれ異なるものの近似した法量・器形をもつ。低く扁平な感じで，たちあがりは多少外反しながら内傾し，高さ1cm程を測る。IIIB期と考えられる。**7・8・9・14**の4点は先の2点に比べて器形が小型化し，たちがり高は0.8cm程になる。IV期におさまると考えられるが，**7・9**は調整や器形から察するとIV期でも多少新しい方（IVB期）の可能性が推定されよう。**10**は小型の受部・高台のない杯身でV期と考えられる。瓶は比較的に小型で，大きく開くラッパ状の口縁部をなし，高さ3.5cmの脚をもつ。福岡県宗像市の相原古墳群[註2]・久戸古墳群[註3]・城ケ谷古墳群[註4]などに近似するものが報告されており，類例資料からV期と考えられる。壺は破片のため判然とせず，胴上部の状況がかろうじてうかがえる。推定ではあるが高台の付く長頸壺と考えられ，あまり角ばらない，若干丸味をもつものであろう。V期におさまるものと考えられる。

以上のように出土した須恵器の編年を考えると，小田氏編年のIIIB期～V期に相当するもので6世紀後半～7世紀前半に位置ずけできよう。他に，朝鮮半島からの土器片が2点あるがどちらも新羅系陶質土器で6世紀末～7世紀初頭におかれており，須恵器との一致を見る。国内では本県対馬のコフノ隈遺跡[註5]・福岡県三郎丸第3号古墳[註6]・相原2号古墳[註7]や，朝鮮半島では蔚州華山里古墳群[註8]や慶州禮安里49号墳[註9]などからの出土報告がある。古来より大陸とのルートである対馬・壱岐は如実に朝鮮半島の影響を受けていたことは予想され，6世紀中頃より新羅の勢力増大の影響を示唆するものであろうか。また，閉塞部からは表裏の両面を燻した黒色土器（B類）の破片が出土し，10世紀後半頃が考えられる。先の須恵器や朝鮮半島の陶質土器とはかなり時代差があることから，この時代には既に石室が開口していた可能性も考えられる。

壱岐の古墳は，まだまだ不明な点が多い。平成元年より，県文化課の県内古墳詳細分布調査[註10]が始められ，壱岐の古墳の幾つかにも調査のメスが入ることとなった。本古墳の調査報告の結果も壱岐古墳の解明の一助として活用いただければ幸いである。

註1　鄭澄元・申敬撤編「蔚州華山里古墳群」釜山大学校博物館遺跡調査報告　第6軋　釜山大学校博物館1983に記載されている文様名称を参考にした。

2　酒井仁夫編「相原古墳群」—福岡県宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査報告—　宗像町文化財調査告書　第1集　宗像町教育委員会1979

3　酒井仁夫編「久戸古墳群」—福岡県宗像町大字福崎所在古墳群・横穴墓の調査報告—　宗像町文化財調査報告書　第3集　宗像町教育委員会　1980

4　原　俊一編「城ケ谷古墳群II」宗像市文化財調査報告書　第8集　宗像市教育委員会　1985

5　藤田和裕・安楽　勉「コフノ隈遺跡」長崎県上対馬町文化財調査報告書　第1集　長崎県上対馬町教育委員会　1984

6　小田富士雄「対馬・北部九州発見の新羅土器」『古文化談叢　第19集』九州古文化研究会　1988に記載

7　註2に同じ

8　註1に同じ

9　註6に同じ

10　長崎県教育庁文化課により「県内古墳詳細分布調査」が平成元年から3ケ年計画で実施されている。平成元年度（初年度）は，笹塚古墳・掛木古墳（壱岐・勝本町所在），大原天神の森1・2号墳（壱岐・郷ノ浦町所在）の4基が調査された。

参考文献

- 副島和明・本田秀樹「カジヤバ古墳」―壱岐郡芦辺町国分川迎触字平原所在―　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第3集　長崎県芦辺町教育委員会　1988
- 松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐　第15号』　壱岐史蹟顕彰会　1981
- 副島和明・伴　耕一朗「大塚山古墳」―壱岐郡芦辺町深江栄触字清水所在―　長崎県芦辺町文化財調査報告書第2集　長崎県芦辺町教育委員会　1987
- 高野晋司「大塚山古墳」環境整備報告書　長崎県芦辺町教育委員会　1989
- 藤田和裕編「京塚遺跡」長崎県芦辺町文化財調査報告書第1集　長崎県芦辺町教育委員会　1983
- 川上　稔編「史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書」　出雲市教育委員会　1988
- 橋口達也編「狐塚古墳群II」―福岡県田川郡大任町今任原狐塚所在・横穴群の発掘調査報告―　大任町文化財調査報告書　第2集　大任町教育委員会　1978
- 酒井仁夫『御笠川東岸における須恵器の編年について』「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―XVII―　福岡県大野城市・筑紫郡太宰府町所在遺跡群の調査　福岡県教育委員会　1977
- 小田富士雄「塚ノ原窯跡群」―八女古窯跡群調査報告I―　福岡県八女市教育委員会　1969
- 佐田　茂・伊崎俊秋「立山山古墳群」福岡県八女市所在立山山古墳群の発掘調査報告　八女市文化財調査報告書第10集　八女市教育委員会　1983
- 鄭澄元・申敬撤編「金海禮安里古墳群I」釜山大学校博物館遺跡調査報告　第8軋　釜山大学校博物館　1985
- 横田賢次郎・森田　勉『太宰府出土の土師器に関する覚え書き』「研究論集2」九州歴史資料館　1976

※　本報告書作成に関して，県文化課の藤田和裕氏・宮崎貴夫氏に御指導・助言を賜り，記して謝意ならびにお礼を申し上げるしだいであります。

PLATES

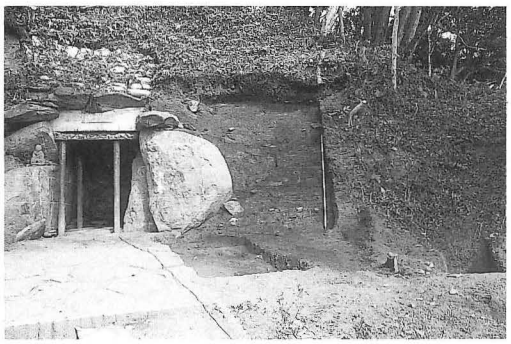
①古墳全景・調査前(南西から)

②古墳近景・調査前(南から)

③墳丘測量状況 1

④墳丘測量状況 2

⑤石室前面，東側調査状況(南から)

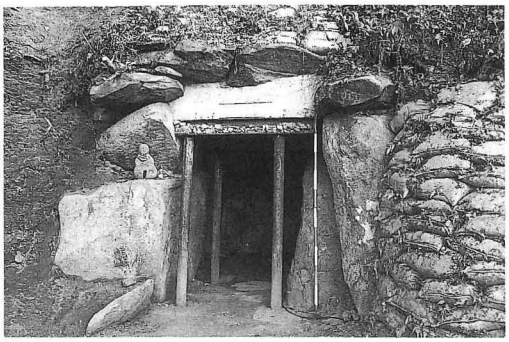


⑥石室前面，東側土層状況(南から)

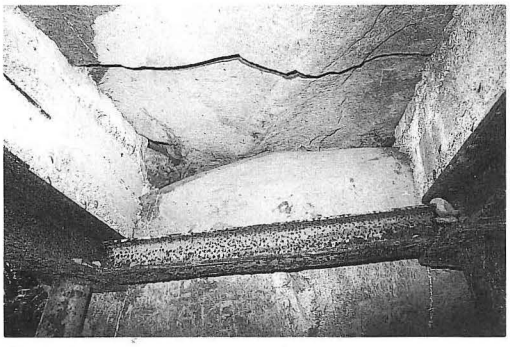
⑦石室前面，西側調査状況(北東から)

⑧墳丘東側，掘削部分(南から)

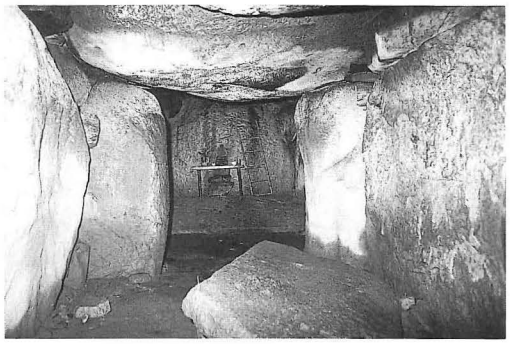
PL 2



①石室前面・調査前(南から)



②羨道天井石の亀裂状況(東から)



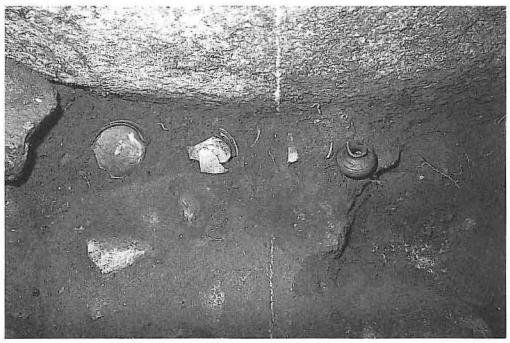
③石室内(中室手前から玄室方向を見る)

④石室内(中室奥から前室・閉塞方向を見る)

⑤前室敷石状況(奥より閉塞方向を見る)

⑥中室敷石状況と棺材(奥より前室方向を見る)

⑦玄室西壁状況(東から)



⑧閉塞部手前の遺物出土状況

①天井石取り外し状況 1（西から）

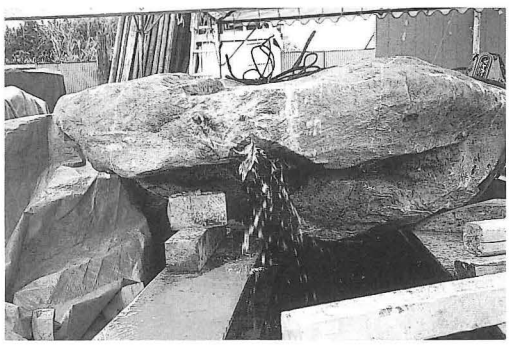
②天井石取り外し状況 2（南西から）

③天井石取り外し状況 3（北から）

④天井石取り外し状況 4（北から）

⑤天井石接着準備状況

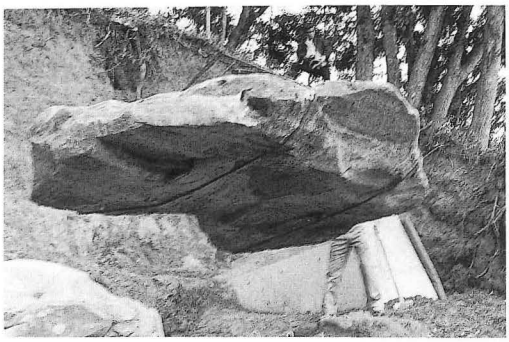
⑥天井石接着強化材（ステンレス丸棒）



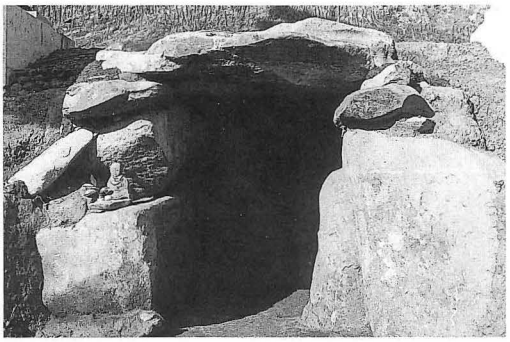
⑦天井石接着状況

⑧ステンレス丸棒貫通作業状況

PL 4



①接着した天井石を設置する(南西から)



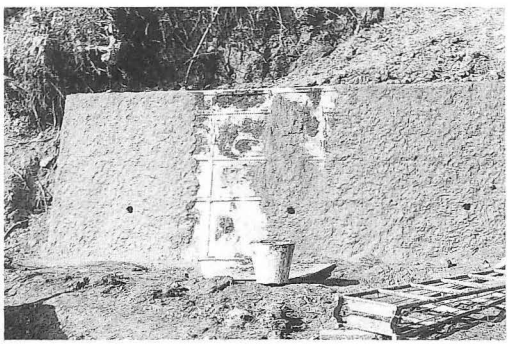
②設置された天井石 1 (南から)

③設置された天井石 2 (西から)

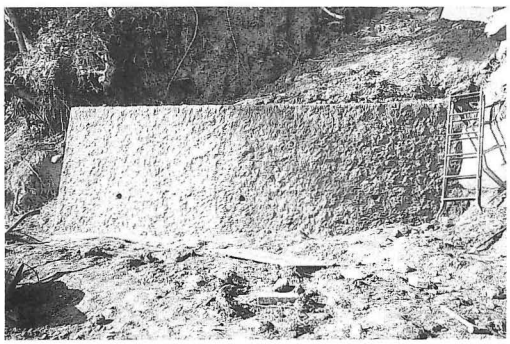
④設置された天井石 3 (東から)

⑤封土崩壊防止用擁壁

⑥擬土吹きつけ準備工



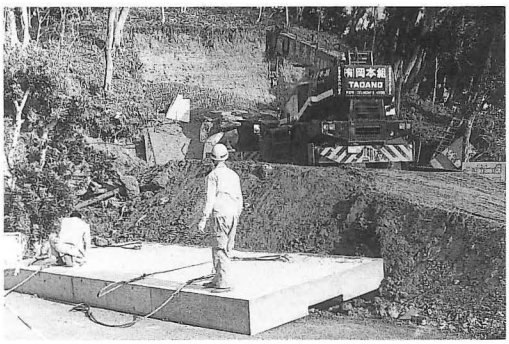
⑦擬土吹きつけ状況



⑧擬土で覆われた擁壁

①修復した天井石設置(南から)

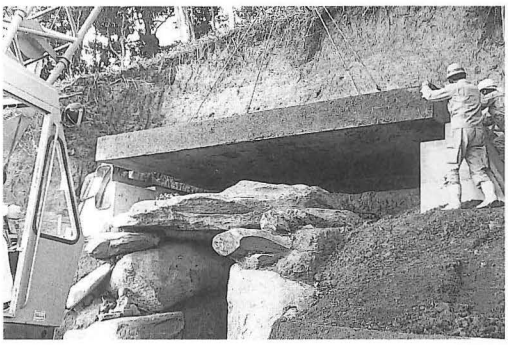
②修復した天井石設置後(南から)



③コンクリートスラブ(17トン)

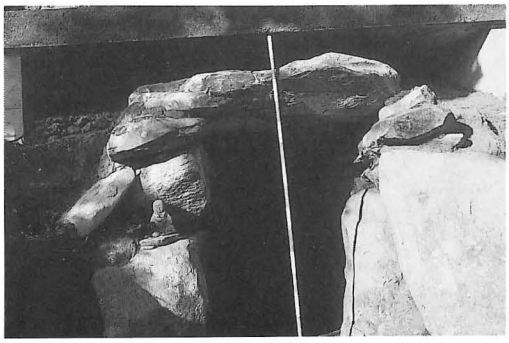
④コンクリートスラブ前面の擬土吹きつけ状況

⑤コンクリートスラブ設置状況(南東から)



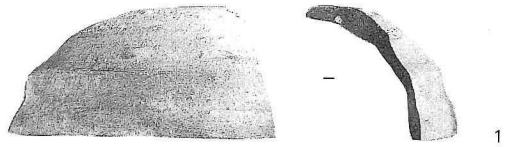
⑥コンクリートスラブ設置後の状況(南東から)

⑦コンクリートスラブ設置後(南から)

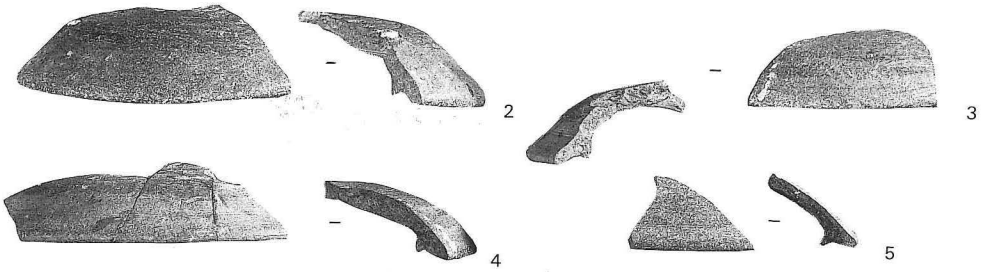


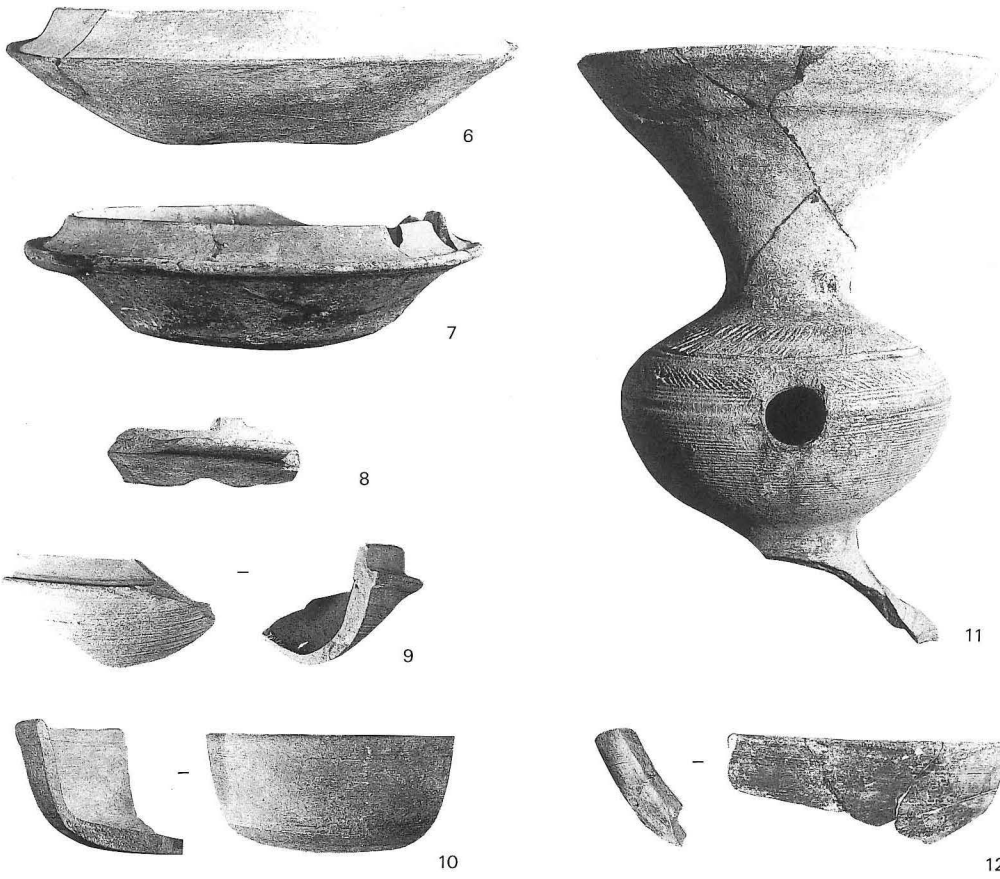
⑧コンクリートスラブと天井石の間隙

PL 6

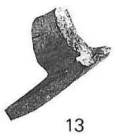


①石室内出土遺物(1/2)

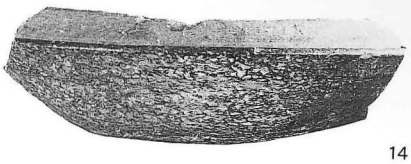




②閉塞部出土遺物(1/2)



13

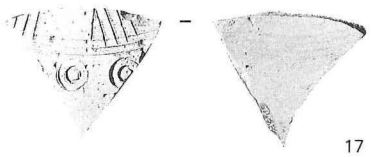


14

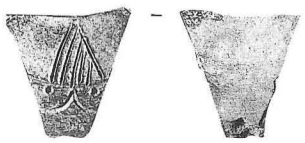
15

16

①前庭部手前(攪乱層)出土遺物(1/2)



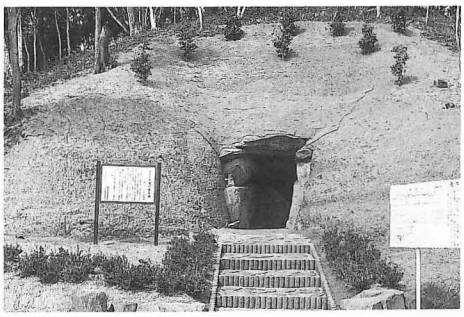
17



18

②朝鮮半島の土器(1/2)

整 備 前



整 備 後

芦辺町文化財調査報告書　第4集

鬼の窟古墳

平成2年3月

発行　長崎県芦辺町教育委員会
〒811-53 壱岐郡芦辺町芦辺浦滝の上524

印刷　昭和堂印刷
〒854　諫早市長野町1007-2